

第 16 回 世界湖沼会議開会式 三日月知事 基調講演

日時：平成 28 年 11 月 8 日（火）

場所：インドネシア共和国バリ島

ディスカバリー・カルティカ・プラザ

~~~~~  
皆さんこんにちは。

滋賀県知事の三日月大造です。

この度、第 16 回世界湖沼会議において、皆様にお会いし、私のメッセージをお伝えする機会を頂けたこと、大変うれしく、また光栄に思います。

私自身は、前回のイタリア・ペルージャでの会議に引き続き、今回が 2 回目の参加ですが、豊かな文化と自然、特にバラタン湖をはじめ世界的に有名な湖沼を有するバリ島での今回の開催、大変楽しみにしておりました。

世界湖沼会議は、滋賀県が提唱し、1984 年に、世界各国から 2,400 人の研究者・行政担当官・NGO や市民の皆さんの参加のもと、滋賀県大津市で第 1 回の会議が開催されました。

滋賀県にある日本最大の湖、琵琶湖の湖畔で一步を踏み出したこの国際会議が、世界各地を巡りながら 30 年以上も続けられ、世界の湖沼問題の解決に向けて貢献してきたことに対しまして、滋賀県の知事として、関係者の皆様の御努力に深く敬意と感謝を申し上げます。

今回、こちらインドネシア・バリ島での、16 回目の湖沼会議は、東南アジアでは初めての開催となります。

国際湖沼環境委員会等が行った世界 41 ヶ国を対象にした調査によると「過剰な資源開発が地球規模で湖沼環境を悪化させている」と報告されています。

こういった中、世界中の関係者が、この地に一堂に会し、課題や対策を共有することは非常に意義深いことです。

今回の会議誘致・開催にご尽力されましたインドネシア政府をはじめ皆様のご努力に心から感謝申し上げます。

さて、本日の午後から、様々なテーマでフォーラムや分科会が行われると伺っております。参加者の皆様の、活発な議論や意見交換を期待します。

またこちらインドネシアでは、バリ島のバトゥール湖を含む全国の 15 の湖沼を「重要湖沼」に指定して、重点的に保全管理に取り組んでおられると伺っております。

是非、その取り組みの成果についても、参加者の皆様と共有していただければありがたいと思います。

さてここで、私ども滋賀県と琵琶湖についてご紹介させていただきます。

滋賀県は、日本の中央部に位置し、日本最大の湖・琵琶湖の水の恵みを受け、古くから農業、商業、工業が栄えてきました。

現在も、国内の交通網の結節点として重要な位置を占めるとともに、国際空港から約 100km の距離にあり、海外からのアクセスも非常に便利です。

この地の利を活かし、滋賀県には製造業が集積しており、県民総生産に占める第二次産業の割合が全国第 1 位となっています。多くの工場が琵琶湖の周りに立地し、140 万人の県民が生活していますが、琵琶湖の水質は非常に高い水準に保たれています。なぜでしょう？

滋賀県民は、琵琶湖とともに生き、自然との調和を大切にして暮らしています。私たちが使った水がどこに行くのかを考え、生き物とのつながりを意識して暮らしています。そして、企業・地域住民・行政等が一体となった努力を続けていることで良い環境を保っています。

琵琶湖の水は、滋賀だけでなく、京都・大阪などの約 1,450 万人の人々の生活や産業を支えています。

水を大切に使い、水の恵み、食の恵みに感謝する滋賀県民のライフスタイルが評価され、2015 年には、琵琶湖とその水辺景観が、日本政府により「日本遺産」として認定されました。こちらのスライドのように、琵琶湖の周りには、美しい自然や文化遺産が数多くあります。

こうした琵琶湖を取り巻く素晴らしい財産を活かし、多くのお客様に観光で楽しんでいただきたいと思います。

私は、自転車で琵琶湖を一周する「ビワイチ」サイクリングをお勧めします。

このスライドのサイクリングを楽しんでいる人物が誰だかおわかりになれますか？

楽しそうでしょう？

琵琶湖での魚釣り、周囲の山でのトレッキングなどの体験型観光、エコツーリズムなどを通じて、琵琶湖を多くの人に知り、好きになってもらうことが、これからの琵琶湖の保全にとって大切なことだと考えています。

滋賀県のブースにはインドネシア語や英語のパンフレットをご用意しておりますので是非、お立ち寄りください。

過去には、琵琶湖が危機を迎えたことがあります。

1960、70年代、急速な人口増加、工業化により、琵琶湖への流入負荷が増大し、富栄養化が進展しました。そして、1977年に、初めて琵琶湖で赤潮が発生しました。

この主な原因が、リンを含む合成洗剤であると知った滋賀県民は、「合成洗剤を使わず、粉石けんを使おう」と呼びかける運動を始めました。

この運動は、「石けん運動」と呼ばれ、県内に一斉に広がり、行政も一緒になって、この運動に取り組みました。

これを受けて、その2年後の1979年には、滋賀県は、リンを含む合成洗剤の使用、販売等を禁止する「富栄養化防止条例」を制定しました。

また、工場からの排水についても、国に先駆けてリンなどの規制を行い、流入負荷の削減を進めました。

まさに県民と行政が一体となって湖沼問題の解決に取り組んだ象徴的事例が、この石けん運動ではないかと思います。

その後も、滋賀県では、湖沼水質保全計画や琵琶湖の総合保全計画であるマザーレイク21計画を策定し、企業・地域住民・大学・行政等が連携して、水質改善、水源かん養、自然的環境・景観保全に取り組んできました。

そして昨年には、国の「琵琶湖の保全及び再生に関する法律」が施行さ

れ、琵琶湖を日本の国民的資産として位置付けて、さらなる取り組みを進めております。

特に近年は、オオバナミズキンバイ等の外来水生生物への対策に注力しているところであり、今回の会議のテーマ「湖沼生態系の健全性と回復力—生物多様性と種の絶滅の危機—」には、大きな期待を寄せております。

今回の湖沼会議にも、滋賀県からは、野田県議会議長やNPO団体の皆さんをはじめ、多くの方が参加しています。

滋賀県の関係者は是非その場にご起立ください。

湖沼会議にご出席の皆様には、是非一度、滋賀県にお越しいただき、琵琶湖や、私どもの取り組みをご覧いただければうれしく思います。

水の惑星といわれる地球ですが、河川や湖沼などの人が利用しやすい状態で存在する水に限ると、その量は、全体の約0.01%しかありません。

一方で、国連の統計によりますと、2050年には、世界の人口は、約97億人になると予測されています。これに伴い、水の需要量も現在から約55%の増加が見込まれ、2050年には、世界人口の40%以上にあたる39億人が深刻な水不足に見舞われる可能性があると言われています。

こういった中、世界各国において、湖沼という貴重な水源を抱える地域の役割、責任は、ますます大きくなってくると考えます。

湖には、周りに住む人々の暮らしや、産業活動の全てが反映されます。

今の私たちの生活に大きな恵みをもたらしてくれている湖を、健全な形で次の世代に引き継いでいくことが私たちに託された使命ではないでしょうか。

今回、世界中から、様々な形で湖に携わっておられる皆様にご参集のことと思います。また、インドネシア各州からも、先の重要湖沼を抱える地域の皆様をはじめ、多くの方々がお見えであると伺っております。

私たちの命の水を守るのは、身近に湖沼を有する私たち自身です。

皆さん、是非、湖沼を抱える地域から、環境保全の取り組みを進め、さらには世界の水問題の解決に貢献していこうではありませんか。

さて、お昼も近づいてまいりましたので、私のご挨拶もそろそろ終わり

にさせていただきます。

皆様の滋賀県へのご来訪を心からお待ちしますとともに、第 16 回世界湖沼会議の成功を祈念しまして、私からのご挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。